

小中学生や子供たちに農業について興味を持ってもらい農業高校生を増やしていくために我々クラブ員は何が出来るか。

クラブ員代表者会議

北海道ブロック東北海道連盟 北海道中標津農業高等学校

食品ビジネス科 3年 漆原 優

生産技術科 3年 椎田 恋羽

食品ビジネス科 2年 山本 藍璃

【概要説明 北海道農業および北海道中標津農業高等学校（農業クラブ）について】

私たちの住む北海道は広大な大地を活かし、稲作、畑作、酪農など大規模で生産性の高い農業が展開されています。北海道の農業産出額は1兆円を超え、全国の1割以上を占めることから、食の安定供給を支える食糧基地として大きな役割を担っています。また、北海道農業における1農業経営体あたりの農地面積は、他府県に比べ約15倍と大規模で専門的な農業経営が特徴です。

北海道農業は広大な大地で行われるとともに気象条件や立地条件が大きく異なることから、各地域において特色ある農業が展開されています。このような現状から、それぞれの地域に則した農業技術の習得が必要となり、日本学校農業クラブ北海道連盟には合計29校が加盟し、大きく3つの地域連盟に分かれています。

私たちの住む中標津町は、人口およそ2万3千人に対し乳牛飼養頭数約4万4千頭を有する酪農を主産業に発展してきました。農村の豊かさをもつ一方で、根室管内の商業集積圏が形成され、都会的な暮らしが共存する農業と商業の交流拠点となっています。私たちの学び舎、北海道中標津農業高等学校は昭和25年に町の発展と農業者の育成を目的に設置された、日本最東端の単置型農業高校です。学科編成は、家畜飼育や花卉・野菜栽培を学ぶ生産技術科と食品加工や流通を学ぶ食品ビジネス科の2間口の町立学校です。創立以来受け継がれている「創造・忍耐・努力」の校訓のもと、この町を支える産業人を輩出して72年目。地域産業の中心で卒業生が活躍しています。



しかし、近年の少子化や北海道農業の衰退を受けて、生徒数が減少。平成2年のピークから在籍数は年々減少を続け、平成29年には在籍数70名。また、入学者数は2学科合わせて15名という過去最低の生徒数となりました。

このような現状がある中で、分科会テーマである『小中学生や子供たちに農業について興味を持ってもらい農業高校生を増やしていくために我々クラブ員は何が出来るか。』というテーマから取組みを考えてみました。1つ目は、クラブ員の想いや声、農業高校の活躍を地域へ発信していくこと。2つ目は、地域の子どもたちに農業の面白さや楽しさを肌で感じてもらうこと。この2つの取組みを中心として、クラブ員が楽しみながら農業クラブ活動に取り組む姿を地域の子ども達に発信していくことが農業高校の魅力を伝えることにつながるのではないかと考えました。それでは、私たちが取組んでいる実践を報告します。



【北海道中標津農業高等学校・農業クラブ実践報告】

(1) クラブ員の想いを地域へつなぐ～地域への魅力発信～

私たちは中農の魅力伝える取組みとして、地元のラジオ放送局「FMはな」に協力をいただき、ラジオ番組「Hello! 中農 Radio」を放送しています。私たちのラジオ番組は今年7周年を迎え、番組スポンサーは計4団体。多くの提供を受け、絶賛放送中です。

この番組は、クラブ員が取組んだ活動を広く地域へ発信していくことを目的に「農業高校では何に取組んでいるのか」を地域の多くの方に理解してもらいたいと考え、放送を開始



ラジオ放送局と連携した情報発信

しました。番組では各研究班の活動紹介や各種コンテストの結果報告、新製品の紹介のほか、農業クラブ行事で活躍したクラブ員をゲストに招き「クラブ員の今」を伝える放送を行っています。

そんな中、コロナ禍の急拡大によって、「FMはな」での収録ができない状況が数ヶ月続き、ラジオ番組「Hello! 中農 Radio」が放送できないこともありました。毎月の放送を楽しみにしてくださる地域のリスナーの方々からは、「ラジオ放送の再開を楽しみに待っています」など温かいコメントが寄せられました。そこで、私たち執行部は解決策を模索。すると、執行部メンバーから「スタジオに行けないなら、オンラインで中継してみよう」というアイデアが出ました。

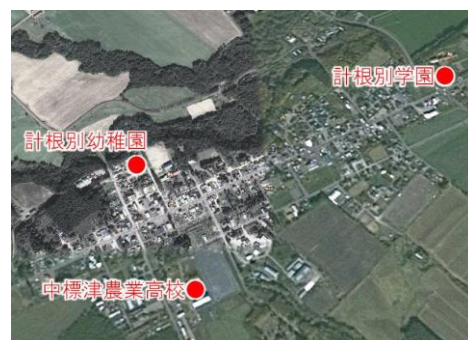
早速、FMはなに相談してみると、快く快諾いただき、オンライン会議サービス Zoom を活用したラジオ放送を実施しました。いつものスタジオでの収録と異なり、オンライン中継の仕方を学んだり、話し方や伝え方を工夫したりと慣れない中でしたが、「町民に楽しんでもらえる番組を届けたい」という思いで放送を再開。放送後には、リスナーの方から「放送再開おめでとう」といった嬉しいコメントが寄せられ、ラジオ放送が私たちと地域のつながりを強める情報ツールとなっていることを再認識できました。

さらに、私たちはコロナ禍において様々な制約がある中で地域への発信力を高めたいと考え、新しい取組みを模索。地元JAに協力を依頼し、町内の全組合員に配布される「JA広報誌」への掲載を開始しました。毎月発行される広報誌には、中農農クの取組みや学科の活動を中心に「中農の今」が伝わるように掲載。広報誌による情報発信によって、私たちの取組みは、着実に地域

へ発信されています。これらの情報発信により、クラブ員の想いや農業高校の持つ魅力をまち全体へ発信することにつながっていると考えます。

(2) クラブ員が地域の未来を創る～地域一体型の農業クラブ活動の実践～

本校の位置する中標津町計根別地区は、幼稚園・義務教育学校（計根別学園）・本校と全ての校種が揃った地域です。私たちは学校間で連携しながら、地域の全ての子ども達を対象に食農一貫教育「計根別食育学校」を実践しています。この取組みは「子ども達に農と食の大切さを学んでもらうこと」「活動をとおしてクラブ員が食育の大切さを確認すること」を目的に全クラブ員が積極的に関わり取組んでいます。そして、地域住民、企業の方々のお力添えをいただき、今年度17年目を迎える取組みとなりました。



伝統ある校種間連携「計根別食育学校」

この食育学校は、幼稚園から中学校卒業までの12年間継続しながら、子ども達の発達段階に応じてステップアップしていく体験プログラムを設定。生産から食品加工に至る6次産業化や農業生物との関わりの中で、「農と食の大切さ」や「生命の大切さ」について学べるプログラムとなっています。この食育学校での学びをとおして、幼稚園児には「感じる力」、小学生には「学ぶ力」、中学生には「考える力」の育成を目指しています。さらに、活動の計画から運営、児童生徒への食育講座までを普段「教わる側」のクラブ員が「教える側」として取組むことで本校クラブ員にも自覚が生まれ、資質向上につながる活動になっています。

この食育学校に参加した子ども達からは「カボチャって、こうやってできるんだ!」と驚きの声を聴くことができ、私たちの活動が地域の子どもの新しい発見や学びの場になっていることを実感できています。このように、地域の子どもの食育学校で感じた「農業への興味・関心」は強く心に残り、食育学校を卒業後は本校へ進学し、「教える側」として活躍するといった人材の好循環も確立されつつあります。



計根別幼稚園とのカボチャ収穫体験



計根別学園との牛ふれあい体験



計根別学園とのジャガイモ収穫体験



カボチャランタンづくり



ビーフジャーキー製造体験



命をいただく出前授業

そして、これまでの取組みが実を結び、農林水産省主催の「第5回食育活動表彰」において、本校が消費・安全局長賞（全国第2位）を受賞。さらに、令和4年度高等学校「フードデザイン」の教科書に事例掲載され、地域に寄り添った活動が高く評価されています。このように、地域へ開かれた農業クラブ活動を継続していくことで、地域全体が一体となって、まちの未来を支える子ども達を育む取組みへとつながっていくのだと考えます。



【分科会テーマのまとめ】

近年、農業高校に進学する生徒は減少を続け、農業の担い手不足は急速に進んでいます。そのような現状がある中で、クラブ員が農業クラブ活動や農業学習に意欲的に取組み、食育活動などの地域に開かれた活動を継続的に実践していくことで、地域の子どもの「農業への興味・関心」が高まり、食育を「教える側」として本校に入学するといった人材の好循環が確立されつつあります。そして、私たちが農業学習を楽しむ姿や主体的に活動する姿勢を見せていくことが、子ども達へ農業の魅力を伝えることにつながり、農業高校への入学者増加や地域社会の発展に寄与する人材育成につながっていくと考えます。

歴代の先輩達が築いたまちの産業を守り、まちのミライを担う世代へ継承していくことは私たち中農農クの大きな使命です。まちを担うクラブ員を育成し、地域とともにまちのミライを創造していく中農農クの挑戦はこれからも続きます。

